
東方夢想花

斉藤 孝之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方夢想花

【Nコード】

N4875J

【作者名】

斉藤 孝之

【あらすじ】

妖祭館での出来事から早数ヶ月が経過し、春が訪れた。幻想郷で暮らす麻耶は穏やかな陽気に誘われ、お花見に行くことにした。

どこがベストの場所であるか調査をした所、ある村の名前を耳にする。そこは一年中桜が咲き誇り、村が桜で覆われていて綺麗だという。

わくわくしていくとそこは一面桜で覆われており見事であった。お

花見をしながら満喫している麻耶であつたが、辺りを見渡すと周りにいる者は花を見るわけではなく、桜に何かを祈るかのようであつた。

不思議に思いつつ花を見ていると、麻耶の視界にある人物が目に入つた。それは幼い頃亡くなつた弟の姿であつた……。

麻耶が何故ジャーナリストを目指すことになつたのか。そしてこの村の正体とは。林 麻耶が大活躍の第2弾！

ブローグ

晴れたその日は絶好の買い物日和だった。私はまだ幼い弟の手を引いて近くの商店街に向かっていた。

弟は買い物に行けることが嬉しいのか、いつも以上にはしゃいでいて私もそれを見てはしゃぎながら歩いていた。

商店街に近づくにつれ私たちの足は弾む。普段見る何気ない風景も、まるで別の景色のようだ。

お姉ちゃんと言う弟の聲が私を笑顔にする。私は弟が大好きだった。

商店街が見えて、横断歩道に着く。信号を確認し青になってから私は弟と手を繋ぎ渡り始めた。

近くで何かの聲がするが、私は何の事を言っているのか分からなかった。ただ分かったのは何かに体を押されたという事だった。

気がつくとその日は赤の世界だった。喧騒の中私は何もできなかった。

その日、私は最愛の弟を失った。

第一章

第一章

妖祭館での出来事が終わってから早数ヶ月が経過した。幻想郷には春が訪れ、穏やかな気候で眠気を覚える程の穏やかな日が続いていた。そんな中私は何をやっているのかというと……

「見て、麻耶！ あの子の下着可愛いですね〜！」

相変わらず文に連れられてパンチラ写真を収めていた。まったく他にやる事がないのかしらと我ながら疑問しか浮かばない。

「はいはい。いいわね〜」

私は適当に相槌をうった。文はその返事が不満だったのか

「気のない返事ですね〜。一体どうしたのですか？」

「他にやる事がないのかな〜、と思って。一体私たちはいつまでこんな事をしているのよ」

「またそれですか。実際に事件が起きている訳でもないし、ニーズがあるのですよ。それを追い求めるのが私たちの使命じゃないですか！」

「使命……ね」

私たちの使命がもしパンチラ収集だったら泣けてくる。第一、普通の人がこれを見たらただの変態に思うだろう。女子高生の趣味はパンチラ写真収集！なんて記事が出たら私は一生外に出ることは出来ないであろう。

「はあ……。いい天気ね〜」

近くにあった木に寄りかかりながら私は思わず呟いた。

日本と同じように幻想郷にも四季があり、見事な桜が咲き誇っていた。日本人の麻耶にとって春はまた特別であり、ある一つの行事をまだしてないことに気づいた。

「ねえ、文？」

「はい。なんですか？」

「ここらへんで一番綺麗な桜はどこにあるの？」

「そうですね．．．．あそこですかね」

「あそこ？」

「はい。ついて来てください」

そういうと文はテクテクと歩いて行ってしまった。

「ちょ、ちょっと待ってよ！」

私は慌てて文の後を追いかけた。

「ねえ、文。ここ？」

「ええ。綺麗ですよ」

確かにここには綺麗な桜が植わっていた。ただ．．．

「でもここ、幽々子さんのお屋敷じゃない！」

そう、文が連れてきたのは幽々子の屋敷だった。いくら見事な桜があるといっても人の屋敷にズカズカ入って行くことに私は躊躇した。

「大丈夫ですよ。さあ、入りましょう」

文はまったく気にすることなくスタスタ中に入って行ってしまった。

「まったく文は．．．．幻想郷の人たちに遠慮という事はないのかしら。」

私は思わず呟いたが、そんな事は無いと思い直した。きっと文が特別なのだ、と。

屋敷の中に入るとそこでは縁側で桜を見ながらお茶を飲む幽々子さんと傍に仕える妖夢の姿があった。

「あら、こんにちは」

幽々子さんは私たちを見かけるとお辞儀をして挨拶してくれた。女の私が見ても素敵だなと思った。

「こんにちは。幽々子さん、妖夢」

「こんにちは」

妖夢は一仕事を終えた後なのか、服の端に少し草が付いていた。

「いや、ここの桜は見事ですね」

気が付くと文はまるで住人の如く寛ぎながら幽々子さんの隣でお茶を飲んでいた。

「ええ、ここの桜は素晴らしいですね」

幽々子さんは別段咎める様子も無く文と談笑していた。なんだか色々気にしていた私が馬鹿みただった。

「そうね。ところで文」

「もっと沢山の桜がある所知らない？ 私、そこでお花見しようと思っただけけど」

「沢山ですか？ そうですね・・・」

文は少し考え、

「ちよっと思いつきませんね。すいません」

「そんな謝ることじゃないわよ。でも残念ね」

私はどうしようか悩んでいると

「では桜村なんて行ってみてはどうですか？」

幽々子さんが思いついたように教えてくれた。

「桜村ですか？」

「ええ。その名の通り、町中が桜で覆いつくされていて、壮観なんですって。見物客も多くて今の時期は見頃なんじゃないかしら」

「へえ、文は行ったことある？」

「いえ、無いですね。初めて聞きました」

「じゃあ、そこに行きましょう。明後日行きましようか。」

私はテンションがあがり文に提案したが

「すいません。私一週間ばかり留守にするので行けないんです。」

「え？ そうなの？」

「はい。なので別の方と行ってください。」

「そう・・・。なら仕方ないわね」

「なら私が・・・」

「駄目です。お嬢様」

幽々子さんが思わず立候補したが、ピシャリと妖夢に言い切られて

いた。

「いいじゃない……。ケチですね」

「ケチって……」

私は二人のやり取りを見ながら二人はいい組み合わせなのだと改めて思った。

「では幽々子さん、場所がどこか分かりますか？」

「あ、はい。ちょっと待ってくださいね」

幽々子さんは紙にスラスラ地図を書く

「これで分かるはずです。写真沢山撮ってきてくださいね」

「はい。任せてください」

私はお礼を言い、お花見のパーティを探すために文を残し屋敷を後にした。

とりあえず私は博麗神社に向かうことにした。理由は特には無い。なんとなく霊夢と行きたいなと思ったからだ。

「霊夢く、いる？」

私は神社の中に声をかけた。しかし返答はない。

「あら、いないのかな？」

私はもう一度声をかけ、少し考えた後中に入ってみることにした。襖を開けると霊夢はいた。しかし何やらブツブツ言っていて聞こえていないようだ。

「なんだ霊夢いるんじゃない。どうしたの？」

「あ、麻耶。久しぶりね」

「ええ。声をかけたのに返事がないから入ってきちゃった。それでどうしたの？ 何やらブツブツ言っていたみたいけど」

「うちの神社の参拝客が増えないのよ。なんとか年を越すことはできたけど来年は分からないからどうしようか考えていてね」

どうやらこの神社は本格的に危険らしい。まあ参拝客が来たとしても多く訪れなければ賽銭も多くないし、それを支えにしている霊夢にとつてまさに死活問題なのだろう。

「ところで麻耶は何の用なの？」

「ああ、忘れてたわ」

私は用事を思い出し霊夢に花見の件を説明した。

「へえ」。いいわね。行きましよう」

どうやら霊夢は乗り気なようだ。

「じゃあ明後日にね。他にも誰か誘ってみるから」

「分かったわ」

私は神社を後にして、道を歩きながら他に誰を誘おうか思案した。かといってすぐには思いつかない。

「まあ霊夢と二人でも構わないか。霊夢だったらゆっくりお花見できそうだしね」

下手に人を誘うと、お花見というより宴会と化してしまう。以前あったピクニックがある一部の人間（？）によって大宴会と化してしまったことを思い出し、なんとしてもそれを回避しなければならなと思った。

ガサガサ

気が付くと後ろの方から何やら音がする。それは道端にはどう見ても不自然な草があった。そしてそれは私が歩くと一緒についてくる。「まったく……」。どこに可動式の草なんてあるのかしら」

草をよく見ると大きなリボンが見える。そんな格好をしている人物は一人しか思いつかない。

「何やっているのよ、チルノ」

私が声をかけるとビクとした。気がつかれないと思っていたのだからうか。

「早く出てきなさいよ。ばれてるから」

私は再びチルノに声をかけた。するとしばらくすると草の中から何故か自身満々なチルノが姿を現した。

「よくアタイの偽装を見破ったわね。さすが麻耶ね」

こんな事を見破れないなんて、世界中探しても見つからないだろう。
「アタイの偽装は完璧だったのに……」

訂正しよう。世界中探さずとも目の前にいたのだ。

「あのね……。まあ良いわ。それで何の用？」

私は下手に絡むと面倒なので、さっさと済ませることにした。

「えっと……。あのね」

チルノにしては何やら歯切れが悪かった。一体どうしたのだろう？

「何？ 用があつたんじゃないの？」

「うん……。あのね」

「うん」

私はチルノの言葉を待っていると

「お団子！」

「……。はあ？」

「お団子がどうしたのよ？」

「お団子が食べたいな〜って」

「食べれば？」

「え？」

「じゃあね。私忙しいから」

私はその場を後にした。さてこの後どうしようか……。

「ま、待って〜」

チルノは私にしがみ付いてきた。無かったことにしようと思ったが、必死にしがみついているのか、なかなか動くことができなかった。

「な、何よ？」

「麻耶〜、分かっているんでしょ？」

そんな涙目で言われても。なんとなくそんな気はしたのだ。恐らくチルノはお花見と一緒に連れて行けと言っているのだろう。

「はあ……。あなたも行きたいの？」

このままじゃ家に行きたくても行けない。私は仕方なしにチルノを誘うことにした。

「う、うん！」

「しょうがないわね。じゃあ来ても良いわよ」

「ほ、本当？」

「ええ。というかそう言わないとあなた離さないでしょ？」

「うん！」

うんって……。まあしょうがない。チルノ一人なら別に構わないだろう。

「じゃあ明後日に行くから。遅刻したら置いて行くからね」

「分かった」

チルノは先ほどの涙目から一瞬で笑顔に変わり去っていった。

「団子、団子、団子。団子大家族」

何やら不思議な歌を歌いながら去って行くチルノを見ながら私は思わずため息が出た。

「はぁ……。まあいつか」

私はこれ以上人を誘うことを止め、お花見の準備の為、家に戻ることにした。

お花見の当日が来た。その日は天候に恵まれ快晴。風も無く穏やかでまさにお花見日和だった。私は待ち合わせの場所で待っていると「ザッ」と後ろから人が来る音がする。

「番号！」

どうせ3人しかいないのだからそんな事をする必要は皆無だったが、一度やってみたかったのだ。私は後ろを見ずにそう言った。

「1」

これは霊夢だ。意外とノリがよかった。

「2」！

これはチルノだ。やけにテンションが高い。どんだけ団子が楽しみなんだろう。

「3」！

「4」！

・・・・。私は幻聴を聞いた気がした。 3 ? 4 ?

「5！」

「6！」

番号は一向に終わる気がしない。私は思わず後ろを見てみる事にした。

「な、何これ！？」

そこには物凄い人がいた。一体どうということなのだろう。

「ちよつとアンタ！ なんでこんなに人がいるのよ？」

私は思わずそこにいた村人A的な人物を捕まえ、喰いついた。

「え？ タダで飯をくれるって聞いたんだけど？」

「え？ 俺は麻耶ちゃんがデートしてくれるって・・・」

「え？ かくし芸が始まるんだろ？」

どうやら何者からの情報のリークがあつたらしい。そしてそんな人物をするなんて不届き者は一人しか思いつかなかった。

「あの烏天狗め・・・」

目を輝かせながらこの工作をしている姿が容易に目に浮かぶ。しかしまずはやらなければならないことがある。

「すう」

私は思いつきり息を吸い込むと

「解散！！」

と大きな声を出し、群衆を解散させた。

三十分後、やっと群衆がいなくなり、その場にいるのは私、霊夢、チルノの三人になった。

「さて、やっと出発できるわね」

霊夢は読んでいた本を閉じるとこちらに歩み寄ってきた。チルノは飛んでいる蝶を無邪気に追い掛け回している。それにしても霊夢が読書をしている姿をあまり見たことが無かった。なので何の本を読んでいたのか気になり聞いてみることにした。

「霊夢、何の本を読んだの？」

「え？ これ？」

霊夢は私自分が読んでいた本を気に書けたことに何故か喜んで
るように思えた。そして嫌な予感がした。

「うん？」

本の表紙がチラツと見えた。多少ボロボロになっているが、恐らく
私の世界から流れてきたものと分かった。そしてその表紙には・
・・。

「えつとね！ これは」

「い、いい！ 説明いいから！」

私は何も見てない！決して美少年が二人裸で抱き合っている所なん
て見えなかった！

「そう・・・。せつかく見つけたのに・・・。」

私は夢であつたと結論付ける事にした。

「私は霊夢に無垢なままでいてほしかったわ・・・。」

「何か言つた？」

「い、いいえ。何も」

私はこれ以上この話題を続けないよう話を切り、お花見の場所に向
かうことにした。

「チルノ！ 行くわよ」

「はい」

私、霊夢、チルノの順で歩きながらいざ桜村に向かうことにした。

今はまだ知るはずも無かつた。そこで塞がった傷が再び開かれる事
になるとは・・・。

第二章

第二章

「地図で言うところちみたいね」

私たち3人は地図を持つ霊夢の先導で桜村を目指し向かっていた。最初はチルノが自分で持つとうるさかったが、前回の事を考え私は全力で阻止した。当然の結果であろう。

「あ、あれみたいね」

そうこうしている内に見えてきたようだ。やはり霊夢を連れてきたのは正解だったようだ。

「お花が綺麗だ〜！」

「あ、本当ね」

まだ村に入っていないが、既に桜が村中に咲き誇っていることが窺えた。花のいい香りが鼻をくすぐる。これは村に入ると絶景だろう。

「お団子、お団子！」

チルノは既に頭の中は団子でいっぱいなのだろう。目が団子になっている。

「あんたは本当に……。桜を見て何にも思わないの？」

私は思わずため息をこぼしている

「まあいいじゃない、麻耶。それもお花見の醍醐味なんだし」

「まあそうなんだけどね」

私も持ってきた弁当を楽しみにしている。まあ今回は放置することにするか。

「凄い……………」

「本当ね……………」

村の中に足を踏み入れた私たちは思わず息を呑んだ。他ではお目にかかれない立派な桜が村を覆いつくしている。そして風によって

舞う花びらがひどく幻想的に見えた。

「これはお花見が楽しみね。さっそく場所を探しましょ！」

私は逸る思いを抑えきれず、最高の場所を探すために歩き出した。

「ま、待ってよ麻耶。そんなにあせらなくても」

霊夢は苦笑しながら私の後に続き歩き出した。チルノは……。
まあ放置でいいか。

しばらく歩いていると大きな桜の木が見えてきた。周りに人もいないし、ここが最適かもしれない。

「霊夢、ここにしない？」

「いいわね。さっそく始めましょうか」

どうやら霊夢も待ちきれないようだ。言うや否や、さっそくレジャースートを敷いている。

「では、かんぱ〜い」

「乾杯！」

私たちは持つてきた酒を注ぐと、乾杯の音頭で飲み始めた。

「あゝ、おいしい！」

「本当ね。普段より何倍もおいしい気がするわ」

私たちは酒をチビチビ飲み始めた。もしここに約数名がいたら大宴会の再来であつただろう。そうならなくて本当によかった。

「うん？　どうかしたの、麻耶？」

「いえ、なんでもないわ。それよりお弁当を食べましょうよ」

「そうね。私結構作つてきたから沢山食べてほしいわ」

「まかせて！　私も作つてきたから食べてね」

お互いに作つてきた弁当を広げる。霊夢のお弁当はおにぎりを主体としたものだった。おかずはから揚げ、卵焼き、ウインナーといったもの。これは男の子には嬉しいだろう。……私は女の子だが。

「あら、麻耶はサンドウィッチね」

「うん」

私のサンドウィッチ。ツナや卵といったものだ。とりあえず、かぶらなくてよかった。

「ではいただきます」

「いただきます」

私たちはお互いの弁当をしばらく食べ比べた。それは穏やかな時間であった。だからだろう。気が付くとぼんやり桜を見つめていた。

「どうしたの、麻耶？　ぼんやり桜なんか見つめて。酔っ払った？」

「いえ、大丈夫。それより片付けさせちゃったわね。ごめんね」

「いいのよ。それよりどうしたの？」

「うん。少し昔を思い出してたんだ……」

「そう……」

片付けを終えた霊夢は自分のコップに酒を注ぐと私の横に並んだ。

「……」

「……」

しばらく私たちは無言で桜を見ていた。しばらくして霊夢はポツリと

「ねえ麻耶。聞いても良い？」

と私に問いかけてきた。

「うん。何？」

「麻耶はなんであんなにスクープとかを追い求めているの？」

「そうね……」

私は少し考え

「有名になる為……かな」

と答えた。

「有名？」

「そう、私はジャーナリストになりたいの。でも普通のジャーナリストになっても、それじゃ記事があまり人の目に触れる事は無いわ。だから有名になるための手段の一つとしてスクープを追い求めているのが正しいのかもしれないわね」

「そうなんだ……。でもじゃあ何でそんなにジャーナリストになりたいの？」

「それは……」

私は言うか否か悩んだ。

「べ、別に言わなくてもいいよ。言いたくないこともあるだろうし」
霊夢は私の考えた様子に慌てて言った。私は苦笑し

「大丈夫よ」

私は言う覚悟を決めた。思えばこの事を人に言うのは初めてなのではないだろうか。これもこの景色と酒のせいかもしれないわね。

「私がジャーナリストを目指し始めたのは本当に些細なことなのよ」
私はポツポツと考えるように話始めた。

「私は昔弟がいたの」

「弟？ 麻耶に？」

「ええ。優って言うてね。言葉の示す通り心の優しい子だった。」

「へえ、そうなんだ。って昔？」

「ええ……。死んじゃったの。事故でね」

「ご、ごめんなさい！ 私余計なことを……」

「だから大丈夫だって」

私は苦笑した。そして霊夢の心遣いに感謝した。この子は本当に優しい子なのね。

「昔、私たちは母親に言われて、近くの商店街に買い物に行くことになったの。その日はとても良い天気で絶好の買い物日和だったわ」
あの日は本当にいい天気だった。まるでどこまでも飛んでいけるような……。

「本当は私一人で行くはずだったんだけど、優がどうしてもお姉ちゃんと一緒に行くといって聞かなくてね。私もしょうがなく二人で行くことにしたの。でも私は本当は嬉しかった。だって、優が私を好きでいてくれるように、私も優の事が好きだったから」

「そう……。仲良し姉弟だったのね」

「そうかもね。商店街へ続く道はよく歩くから見慣れていたけど、私は優と一緒に並んで歩くと別の景色に見えたの。道の端に咲く花も、民家に咲き誇る草木も。何もかもが素晴らしいものに思えたわ。まったくなんて姉バカよね」

「そんなことは無いわ。素晴らしい姉弟だと私は思うわ」

「ありがとう」

きつとこの子は本心で言ってくれているんだろう。私は続きを始めた。

「商店街の前には横断歩道があつてね、私は青に変わるのを待ちながら弟に何を買つてあげようか考えるのが楽しかった。行く前に母親に二人で何か買いなさいってお小遣いを貰つていてね。それを弟には内緒にしていたから驚かす事を考えるのが楽しかった。」

本当にあの時は楽しかったな・・・。

「信号が青に変わつて私たちは手を繋ぎながら歩き始めたわ。しばらく歩いていると周りの人が何か言っている気がしたけど私は何を言っているかわからなかった。ただ気が付いた時には何かに体を押されていたわ。そして目の前に赤の、血の世界が広がっていたわ。その時は分からなかったけど優が私を助けてくれていたのね・・・」

「麻耶・・・」

「後からの話で、原因が運転手の飲酒、及び居眠り運転の不注意である事がわかったわ。その後私は子供心に怒りを覚え、新聞を見ると掲載はほんの小さなもの。思わずテレビをつけたわ。こんな悲惨な事件が取り扱われないはずがないってね。子供心は単純よね。そんな地方の事件なんて全国放送で放送されるはずが無いのに」

「麻耶！」

「ニュースでやってたのは芸能人の交際疑惑一色だったわ。そりゃそうよね。そっちの方が人の気を惹きやすいんだから。でもね、その時の私は信じていた。こんな悲惨な事件が報道されないはずはない。きつとニュースで報道で大々的に報道されているんだって」

あの時の悔しさは今でも忘れないな。

「私はその時に思ったの。こんな世の中は間違っている。世の中はそんなくだらない事を報道する事より伝えなければならぬ事が沢山あるんだって。だから私は！」

「麻耶・・・。ごめんね」

気が付くと私は霊夢に抱きしめられていた。そしてその時初めて涙

を流していることに気が付いた。

「ごめんね……。そんな過去を話させちゃって。もういいから……。大丈夫だから」

霊夢は優しく慰めるように抱きしめてくれた。だからだろう。今まで抑えてきた気持ちが溢れてきた。

「私が……。私がもっと注意していれば……。私があの時の周りの声に気づいていれば優は助かったかもしれないのに。優は生きてたのに……。ごめんね……。優……」

私は霊夢に抱きしめられながらただただ謝ることしかできなかった。そして多くの涙を流す事しか……。

「大丈夫？」

「ええ……。ありがとね、霊夢」

どれだけの時間が流れたのだろう。私が泣き止むまで霊夢はずっと抱きしめてくれていた。

「話がまだだったわね。えっと……」

「もういいわよ、麻耶。辛いでしょ？」

「うん。でも霊夢がいるから。だから大丈夫」

「そう……。わかったわ」

霊夢はそう言々と私の手を繋いだ。きっと彼女の大丈夫だという合図なのだろう。

「それから私はどうしたら正しい事を伝えられるかって考え始めたわ。最初はテレビに関るうと考えただけど、テレビは視聴率が何より大切なもの。だからどんなに頑張っても駄目なんだと分かったわ」「視聴率……。つまりどれだけの民衆が見ているかという数字の事ね」

「ええ。それで色々考えていたときある一冊の本を見つけたの。それはある有名なジャーナリストが書いたものなんだけど、それは今の世界が飢餓に苦しんでいるというものだったわ。そしてそれは有名な人が書いているという事で多くの注目を集めていたの。そして

テレビでも多くの報道がされていたわ。本は私が知らなかった多くの事が書かれていたわ。それは日本では知ることができなかった多くの悲しくも、生きる者としては知らなくてはいけなかった多くのことが」

「なるほどね・・・だから麻耶は」

「ええ。だから私はジャーナリストになることに決めたの。有名なね。そうなれば私は誰に制約されることなく正しく、伝えなければならぬ事を伝えることができる。芸能人のくだらない、どうでもいい事よりね。」

一通り話し終わると私は霊夢に寄りかかった。

「こんな事話したの初めてだわ・・・」

「あらそうなの？ それは光栄ね」

「ふふ・・・」

私は霊夢が居てくれて本当に良かったと心から思えた。

「ねえ麻耶、なんか変じゃない？」

「うん？ 何が？」

「あのお婆さん何か祈ってるようだけど・・・この桜、何か特別なのかしら？」

「さあ・・・幽々子さんからは何も聞いていないけど。でもそう言われると周りには何人もが桜に祈りを捧げているわね」

私はどうしたのか聞くために近くのお婆さんに話を聞くために近づいていった。

「ねえお婆さん。どうかしたのですか？」

返事は無い。それだけ必死に祈りを捧げている。

「聞こえていないみたいね。うん？」

お婆さんが何やらブツブツ言っているのが聞こえた。それは

息子を・・・どうか息子を生き返らせて・・・

そう聞こえた。

「受験合格や健康とかならまだしも……。普通のお願いじゃないわね」

「そうね。霊夢、しばらく自由行動にしましょう。何かこの村へんな気がするわ」

「わかった。一時間後集合ね」

「了解」

私たちは情報収集するために二手に分かれた。しばらく歩いていると多くの人間がいた。そして全員が祈りを捧げていた。

「まさか死者を蘇らせるなんてバカなことは無いわよね。」

私は思わず以前の妖祭館での出来事を思い返した。娘を生き返らせるために起こしてしまった悲惨な出来事を。

「とにかくもつと情報収集をしないと……。あら？」

目の前には小さな屋台があった。そして旗には「だんご」と書かれている。どうやらここは団子屋らしい。

「そういえばチルノはどこいったのかしら」

私は団子屋をスルーし情報収集に急ぐことにした。しかし通り過ぎる直前に聞いた

「お譲ちゃん、沢山食うね」

「あたりまえだもん。アタイ最強だもん」

という会話に足を止めた。どうやらまともな人がいるようだ。そして今の会話を聞く限りチルノもいるらしい。

「入ってみるか……。すいません！」

「はい、いらつしやうい」

中に入ると行くと思を山盛りにして団子をパクつくチルノと、人の良さそうな店主がいた。

「らつしやい、何にします？」

「ごめんなさい。ちょっと話を聞きたかっただけなんですけど」

「そうかい……。で話って？」

「実は……」

私は桜に祈りを捧げている人達のことを聞いてみた。

「なんだい、お客さんそれを知らずにここに來たのかい？」

「え？ 何か知っているの？」

「知っているも何も……。ここがどこだか知っているのかい？」

「知っているって……。ここは桜村でしょ？」

「それは10年前の名前だな。今の名前は蘇桜村だよ」

「蘇桜村……」

「つまり蘇る桜の村。ここは死者を蘇らせる不思議な村だ。」

「そんな……」

まさかそんなことが本当に起きるのだろうか……。

「いけねえ……。もう店じまいの時間だ。悪いけどここまでしてくれるか」

「分かったわ。ありがとう。それじゃ」

「アタイも行く！」

二人は外に飛び出す。しかし足は動かない。あるえ？

「お金……ハラエ」

「まったくどんだけ団子食べたのよ！」

「ご、ごめんなさい……」

私がいっきりに拳骨をしたのでチルノは涙目だ。それにしても

「はぁ……。もういいわ。そろそろ霊夢と約束した時間ね。それじゃ」

私はもう一度お礼を言うために後ろを振り返った。するとそこには

「あ、あれ？ 無くなってる。嘘!？」

そう、そこには最初から何も無かったかのような感じであった。

「また面倒な事に巻き込まれたみたいね。でもいいわ。絶対解決して見せるわ。チルノも働きなさいよ」

「わ、わかった！」

私たちは再び桜の木に集まった。どうやら霊夢も似たような情報を持ってきたらしい。

「どうやら死者が関係しているようね」

「ええ。でも任せて。伊達に巫女じゃないわ」

「チルノも頑張るよ」

そうだ、チルノはまったくの戦力にならないが巫女の霊夢がいる。

これは力強い！

「よし、頑張るわよ」

「おー！」

・・・チルノしか声がしない。

「霊夢？」

探せど探せど霊夢の姿は無かった。そして一枚の手紙が落ちていた。
・・・。

第三章

第三章

頼りの霊夢の姿はそこは無かった。そして気が付けばそこには一枚の手紙……。

「一体どうしたって言うの？」

私はその手紙を開けてみることにした。その手紙には

暇だったので霊夢は一週間預かったわ。代わりの物を送ったから頑張ってるね

「はあ!？」

何が何やらサッパリだったが、霊夢は連れてかれてしまったらしい。「一体何なのよ……。これから霊夢がかなり重要になってくるっていうのに……。それにしても一体誰がこんな事を？ それに代わりの物って何かしら？」

私が思案していると

「ねえねえ、麻耶？」

「何、チルノ？」

「あそこに何が落ちてるよ？」

どうやらそれが代わりの物のようだ。一体何が送られてきたのだろう……。う……。う……。

私は近づいて拾い上げた。こ、これは……。うわ……。大きいね！」

それは成人男性が見るような、いわゆるアダルト雑誌だった。しかもやたら胸が大きい人が多かった。というかチルノがガン見してる！「チルノ、あんたにはまだ早い！」

私は慌ててチルノから雑誌を取り上げる。そして雑誌を手で握り締

めた。

「くっ！ 私をバカにして！ こんな物何の役にも立たないじゃない！」

しかも何でよりもよってこんな……、胸の大きいものばかりなのよ！

「じーーーーーーーーーーーーーーーー」

何やらチルノが私のほうをジッと見ている。しかもある部分を。

「ふっ」

チルノは鼻で笑った。こ、この野郎……。

「ねえチルノ、あそこカエルが空を飛んでいるわよ？」

「え？ どこどこ？」

私がついた嘘にチルノが飛びつく。私が指差した方を見てキョロキョロ。もらった！

「うおおおおおおおりやああああああああ！」

私は自分のリミッタを解除し、全力でチルノのお尻を蹴り上げた。
「うわあああつああああああ……」

星となって消えるチルノ。

「はあ、はあ……」

私は肩で息をしながら、自分の胸を見つめた。

「い、いいじゃない別に。大きくなくても。女は胸じゃないわよね」
確かに大きいのは懂れるけどね。そんな事を考えながら私はことの重要さに気づいた。

「とにかく、霊夢はいない。代わりのものは無かった。これはかなり拙いわね。一人で解決しないと。」

こうなると別に誰か連れてこなかった事が悔やまれる。まあ今更言っても始まらないのだが。

「とにかく情報収集を続けるしか無さそうよね。パートナーがいな
い以上、地道な行動をしてかないと。ここであれこれ考えても仕方
ないし」

元より行動している方が性に合ってるのだ。さっそく行動を始めよ

う。

「まずは情報収集ね。これをまず徹底してみよう。」

私はとにかく手当たり次第に村人に声をかけてみることにした。

「うゝむ……」

結局話しかけまくった結果得られた情報はつきり言って大した事は得られなかった。得られたのは唯一つのこと。

皆、死者を蘇らせるよう祈り続けている

という事。話しかけても返事をしてくれる人はいなかったが、呟く言葉を聴いてみてそれが分かった。

「本当に死者が蘇ることなんてあるのかしら？」

普通に考えればそんな事はない。しかしここは妖怪が住む幻想郷。あり得ない事が起きても不思議ではない。ただ……。

「皆なんだか怖いよね……」

そう。皆様子が尋常ではないのだ。もし、死者が蘇るという事で皆が訪れているのならもっと希望に溢れている気がするのだ。もちろん縋る為にここに来ている事を考えても、ここまで鬼気迫るのだろうか？。

「やっぱり起こるかどうかわからないから、皆半信半疑なのかしら」私はふと幼い頃失ってしまった最愛の弟を思った。まだ幼かった弟が生きてたら今頃どんな生活を送っていたのだろうか。身内贔屓があつたことを考えても弟は運動がうまかった。もしかしたら部活に入って活躍していたのかもしれない。そんなことをふと考えてしまった。

「優……」

私は思わず祈った。もしここが本当に死者を蘇らせる事ができるなら優を蘇えらせて欲しい。私はもっと話したいことがあつたのだ。

「麻耶？」

私はチルノがかけた声で正気に戻った。気が付けば長い間祈っていたのかもしれない。

「ああ、チルノ。あなたどこ行つてたの？」

「アンタが蹴つ飛ばしたんじゃない！」

そうだったのか？ 私にはそんな記憶は無い。きっとチルノの妄想だろう。

「うつ……。お尻痛いよぉ」

「まあまあ、そんな妄想話言つても仕方ないわよ。まだ調査は進んでないんだし、アンタもしっかり働きなさいよ？」

「も、妄想じゃないもん！」

チルノが抗議を何かしているが、記憶に無いのだから仕方ない。相手にすることはないだろう。

「それにしても八方塞ね。情報収集はもうしたし。どうしたら良いのかしら……。」

ここに霊夢がいたら何かアドバイスが得られたかもしれないが、いない事をあれこれ言つても仕方がない。何か別の方法を探さなくては。

「ぶう」

何やらチルノが膨れている。

「何よチルノ。まだ何かあるの？」

だんだん私はチルノの相手をするのが面倒になってきた。……。そこら辺に埋めてやろうかしら。

「いいもん……。せつかくアタイいい情報を掴んできたのに！」

チルノはそう叫ぶといじけた様に地面に文字を書き始めてしまった。というかこいつは何といった？

「チルノ、本当なの？ いい情報つて？」

「いゝ！ 麻耶になんて教えてやらない。麻耶なんて大嫌い！」

どうやら本格的にヘソを曲げてしまったらしい。いつもなら放置しておく所だが何分手が見当たらない状態なのだ。私はどうやってチルノの機嫌を直せるか考えた。とりあえず謝ってみるか。

「ね、チルノ。私が悪かったわ。情報教えてくれない？」

「プイ！」

こ、こいつ！　どうやらチルノは徹底抗戦の模様。こっちは聞く耳を持たないらしい。

「さて・・・」

私は真剣に考え始めた。まず情報を整理しよう。最初にターゲットの情報からだ

氏名

チルノ

うん。まずはここは問題ではない。というかここに問題がある奴はいるのだろうか・・・。

性別

女性

まあ女性というより女の子という方が妥当だろうが。ここも問題ないだろう。・・・まさか男？　無いよね・・・。

「でもここは攻める場面かもしれないわね」

自分もそうだから分かるが、女性にとって容姿を褒められることは嬉しい。たとえ在り来たりな言葉であったとしても悪い気はしない。

「ここは保留ね」

次行ってみよう

特徴

バカ

もはやチルノを考えたときこれに尽きるであろう。ならば普通の人ではまったく通用しそうにないが、チルノには効く方法を考えてみ

る方がいいかもしれない。

「よし！」

私は作戦を思いついた。これはチルノにしか効果が無い作戦。しかしチルノだから効果的である作戦。今、その作戦の火蓋が切つて落とされた！

「あゝあ。もう方法が無いわ・・・」

まず私は明らか手段が無いことをまるで独り言のように言い、落ち込んで見せた。向こうが聞く耳を持たないのであれば、返事を期待せずこちらのことを聞かせてやればいいだけだ。

「私の頭じゃこれ以上動くことはできないわ。どこかに天才はいないかしら？」

チラツとチルノを見ると耳がピクッと動くのが分かった。効果はバツグンだ！

「どこかに可憐で頭の良い方はいないのかしら。そんな人がいたら私、大助かりなのに！」

私は最後の止めの如く声を高めた。これで釣れるか？

「・・・・・・・・・・」

変化は無い。失敗・・・・か。

「しょうがないな〜！」

釣れた！ しかも無意味に無い胸を張って仁王立ちしてる！。やっぱりバカだった！

「まったく麻耶はアタイがいないと何にも出来ないのね〜」

「そ、そうね」

我慢だ私。ここで殴つては・・・・・・・・。

「で、チルノ。情報を教えてほしいんだけど？」

「え〜と・・・・・・・・。忘れた」

まるでテヘっと言わんばかりの感じで頭に手を置いて。

「じゃあ情報は無いのね？」

「うん！」

今度は威張った。ねえ、もういいよね？ 我慢しなくてもいいよね？

「ふふふふふふふ」

「ま、麻耶？」

「ねえ、チルノ。寒い？」

「え？ 寒くは無いか？」

「そう、寒いんだ？ 聞くとところによると土の中って暖かいらしいわよ。よかったわね」

「麻耶怖い……」

「ふふふふ……。覚悟！」

「す、ストップ！ 今思い出したよ！」

チルノは突然抵抗を始めた。無駄な抵抗を……。

「あっちにね。一軒家があったの。皆そっちに行ってるみたい。ね、ね？ いい情報でしょ？」

「本当ね？」

私は徐々にクールダウンしていくのが分かった。まったく大人気なかったかもしれない。

「う、うん！」

私はチルノの情報を整理しながら周りの様子を窺った。するとある新しい事が分かった。

「皆同じ向きなのね」

そう、皆桜に向かって祈りを捧げている点は何も変わってない。しかしよく観察してみると皆同じ方角を向いて祈っていたのだ。おそらくチルノの情報が正しければその方向に向かっていけばその一軒家があるはず。今の状況を考えれば向かうしか無さそうだな。

「とにかく行ってみるしかないさそうね。行くわよ、チルノ！」

「うん！」

私は方向を確認しながら歩き出した。しばらく歩いていくと丘のようなものが見えてきた。

「あれね」

微かだが家のようなものが見える。どうやらチルノの情報は正しかったようだ。

「チルノもたまには役に立つわね」

私はチルノに向かって話しかけるとチルノは何やら必死に笑いながら手を振っている。

「あんた何やってるの？」

私はチルノが手を振る方向を見た。誰かが手を振っている。

「男の子？ あれ……。でも」

私は心臓の鼓動が高まるのが自覚できた。何故ならその姿は「優……」

そう、その手を振る少年はまさしく私の最愛の弟そのものだったのだから……。

第四章

第四章

私は目を疑った。まさか本当に死者が蘇るとは思わなかったからだ。

「優！」

気が付けば私は叫んでいた。すると突然風が吹いた。

「きゃあ！」

思わず目を瞑る。すると気が付けば優の姿はそこには無かった。

「一体どうなっているの？」

私は辺りを見渡すが優の姿はどこにも無い。あれは幻だったのだろうか……。

「ねえ、チルノあなたも見たわよね」

私はチルノに聞いた。何せチルノは手を振っていたのだ。見ていないはずが無いのだ。

「え？ 何が？」

「さっきの男の子よ。あなたも見たでしょ？」

「うん。見たけどそれがどうかしたの？」

どうやら私が見たのは幻ではないようだ。とすると本当に死者が蘇るらしい。

「とにかくこの家に入ってみましょう。この村の不思議について何か分かるかもしれないし」

私たちは丘を登り始めた。丘を登りきるとそこからは村が一望できた。相変わらず村は桜で覆われていて見事なものであった。

「こうやって見ると見事なものね」

村を眺めた後、そこにある一軒の家を見る。そこにあるのは何の変わりも無い普通の一軒家だった。

「特に変わった所は無さそうね」

私はチャームを探すが見つけることは出来なかった。

「ごめんくださ〜い」

とりあえず家のドアを叩いてみる。しばらく待つが返答は無い。留守なのだろうか……。

「どうしようか……」

しばらく思案する。勝手に入ることも不可能ではないが、そんな事をしては犯罪である。そんな馬鹿な事は出来ない。

「たのも〜!」

チルノが何も考えず勝手に入っていく。馬鹿がここにいた事をすっかり忘れていた!。とういうか鍵はかかってなかったらしい。

「まったくあの子は……。まあいつか。解決したしね」

私は何か非難されたら全責任をチルノに負わす事を心に決め、チルノの後に続くことにした。

「おじゃまします」

私は靴を脱ぎ、部屋の中に入った。そこはまるで私の現実世界である家の内部そのものだった。まずこんな家は幻想郷では無いだろう。「まるで私の世界に帰ってきたみたい……」

私は一通り家を眺めた後家主を探す。どうやら本当に留守みたいだ。「わ〜い、わ〜い」

チルノは家にあるソファアが気に入ったのかずつと飛び跳ねている。無邪気なものである。

「随分やかましいわね。一体どなたかしら?」

声の方を見ると妖艶な姿をした着物姿の女性がいた。おそらくこの人がこの家の家主なのだろう。

「すいません!。勝手に邪魔して」

私は慌ててチルノを掴み、一緒にお辞儀をする。そりゃ勝手に自分の家に入られたら気分が悪いだろう。普通なら警察を呼ばれる……。チルノ、あなたの事は忘れないわ!

「まあいいけど。あなた誰?」

どうやら勝手に入った事に怒ってはいないようだ。チルノは無事らしいわね。

「私、林麻耶っていいいます。この村にはお花見をしに来たのですけど、死者が蘇るって聞いて、調査しているんです。」

私は自己紹介とここまで来た経緯を説明する。

「調査ね。何で調査なんてするの？」

「どうやら彼女はエミリーというらしい。優雅に紅茶を飲みながら私に聞いてきた。」

「だって死者が蘇るなんてあり得ないじゃないですか。そんな事が起こるはずがないですよ」

「あり得ない…、ね」

エミリーは少し考えた後、

「麻耶、あなたこの世界の人間じゃないでしょ？」

と突然言い出した。私はドキリとした。何故分かるんだろう。

「やっぱりね」

私の反応で分かったエミリーは嬉しそうに笑った。

「この世界はね、色んな事が起こる。空を飛ぶ人もいれば、魔法を使うことも出来る。だったら死者が蘇っても不思議ではないのよ」

「でも、ここに訪れている人は普通じゃありませんでした。何か、最後の希望にすがりに来たよね…、そんな感じでした」

そう、確かに幻想郷は私の観念では起こりえない事が多く起こる。

不思議な事が起こってもそれは不思議な事ではないのだろう。しかしここに来ていたお婆ちゃんなどを見ていると何か違和感が捨て切れなかったのだ。

「それにこの村で死者が蘇るようになったのは十年前からと聞きました。私はそれが何で変わったのかを調査したいんです」

「そう…」

エミリーは少し考えた後

「では、あなたはその真相に行き着いた時どうしたいの？」

「え？」

「もし仮にその十年前に何かが起こったとしましょう。それはもしかしたら非合法的な悪質なものだったのかもしれない。でも今の現状は死者が蘇り、多くの人が亡くなった者と再び会うことで幸せに満ちている。ここに何の不満があるというの？」

「それは…」

私は言葉に詰まった。確かにこの村の真相を突き止めたとして、私は何がしたいんだろう。

「それにね、ここは人の希望が集まっている。お金持ちになりたい。綺麗になりたい。そんな事を抱いて来る者もいる。だけどそんな事は本人の努力で叶えられるのよ。でも死者を蘇らせる事は出来ない。それをこの村は出来るの。あなたは多くの人の希望を潰すの？」

私は言葉を返す事が出来なかった。その様子を見たエミリーは徐に紅茶を差し出す。

「あなたがすべき事は調査なんかじゃないわ。あなたは自分の思いを叶えればいいのよ」

私は差し出された紅茶を飲んだ。すると次第に意識が遠くなっていた。恐らく薬が入っていたのだろう。

「これは…」

「これはあなたの希望が見れるもの。あなたの希望は何？」

「私は…」

私は答えることが出来ず、深い眠りについた。

私は高校生になっても弟が好きだった。優は中学で野球部に入りエースで4番。キャプテンとして皆をひっぱっていた。私はそんな優をととても誇りに思えた。

友人はブラコンと冷やかすが、私は気にしたことが無かった。だって家族が活躍するのはとても誇らしいこと。恋愛感情なんて微塵も無い。ただ、私は家族として、弟が愛おしく、そして誇らしかった。

でもそんな事は実際に起こることは無い。だって私が奪ったのだから。

急に視界が変わる。優は血だらけの体で私に言う。

「あんたが俺の人生を奪ったんだ。俺の輝かしい人生を…」

私は何も言い返せない。間違いなく真実なのだから。優は気がつく
とそこにはいない。

「ごめんなさい…。ごめんなさい…」

私はもう居なくなってしまうた優に向かって謝罪を言い続ける。

私は思った。

優に会いたい。会って謝りたいと。

気がつくと私は涙を流していた。目の前には相変わらず優雅にエミリーは紅茶を飲んでいた。

「分かったかしら？ あなたの成すべきことが」

「ええ。私は優に会いたい。」

これが私の本心なのだろう。

「ふふふ…。とりあえず今日はもう休みなさい。明日、あなたに会わせて上げるわ。あなたの最愛の人にね」

気がつけば既に日が暮れていた。ここはエミリーに従った方が賢明であろう。

「そういえばチルノは？」

あの無邪気な声が聞こえない。どうしたのだろうか…。

「あの子ならずと寝てるわよ？」

エミリーが指差す方向に目を向けると、ソファで横になりながら口を大きく開けてぐっすり眠るチルノがいた。

「あなたはそこに部屋を使ってね。」

私はエミリーが指差した部屋に入る。そこは布団がひいてあるだけの質素な部屋だった。入る直前エミリーの

「いい夢を…」

の言葉がやけに頭に残った。私は布団に入ると直ぐに眠りについた。

「はっ！」

私は思わず飛び起きた。心臓がバクバク言っているのが分かる。

「何、あの夢…」

もしかしたら薬の影響が残っていたのかもしれない。しかしその可能性を一蹴することにした。だってそれは

「私がそういう願望をもっているって事じゃない！」

私は赤面しながら、夢だと必死に否定した。無かったことにしよう！
「おはようございます」

私はエミリーに挨拶する。

「おはよう」

エミリーが紅茶を飲みながら振り返る。この人は紅茶をどれだけ飲むのだろうと暢気に考えた。

「いい夢は見れた？」

「え、ええ…」

私ははぐらかす。

「それはよかったわ。」

「ええ。ところでチルノを知りませんか？」

ソファーはもぬけの殻だ。どこに行ったのだろう？

「あの子なら外で遊んでるわよ？」

そう言われて私は家の外に出てみた。近くに遊び場があるらしい。
「うー！」

チルノの怒る声がする。どうやらあそこらしい。

「まったくチルノは…」

私は近づこうとすると

「お前本当にバカなんだな」

という男の子の声がした。

「まさか…」

私は思わず駆け出した。あの声を聞き間違えるはずがない。だってあれは

「優！」

私の最愛の弟の声なのだから。

近づくとうちはチルノと野球して遊んでいた。優は死んでしまった当時と変わらない容姿をしていた。

「いくぞ」

「来い！」

優がピッチャーでチルノがバッター。しかし優のいたずらでチルノはまったく打てなかった。

「お前はバカだな」

「バカじゃないもん！」

私はしばらく眺めていたが、

「あ、お姉ちゃん！」

優が私を見つけて駆け寄ってきた。私は久々の対面でどうしたらいいかと戸惑っていると

「へへ、久しぶり。お姉ちゃん！」

私は弟と奇跡の再会を果たした。

第五章

第5章

私は愛しの弟と対面したのにもかかわらず、思った以上に動揺したいたのかすぐに返事をする事が出来なかった。

「？ どうしたの、お姉ちゃん？」

「あ、ああ…。なんでもないわ。久しぶりね、優」
なんとか笑顔を作り、優に返事をした。

「お姉ちゃん大きくなったね」。僕と全然違うよ」

「それはそうよ。あれから何年経ったと思ってるのよ？」

違う。私は優にこんな事を言いたかったのではない。しかし言葉にすることは出来なかった。

「そうだよ。でもよかった。お姉ちゃん元気そうで」

「優も元気そうね…。ってこれは何か変か」

「変だよ。だって僕は死んでるんだもん」

優は無邪気に笑いながら話す。私は優の顔を直視できなかった。

「お姉ちゃん、ちよつと用事があるから行くね」

「うん。僕はまだあのバカと遊んでいるよ」

遠くからバカつて言うなと叫ぶチルノの声がする。優は慌ててチルノの方に駆けていった。

「夢にまで見た最愛の弟とのご対面だっていうのに随分浮かない顔ね」

私は一度エミリーの家に帰ろうと歩いていると、エミリーとすれ違つて話しかけられた。

「ちよつとうまく話せなくて…。言いたいことはたくさんあるのに…」

「まあ、長い年月を過ごしてきたのならそれも当然かもね」

エミリーはそれだけ言うと去っていつてしまった。

「長い年月…、ね」

私は家の中に入りイスに腰をかけて呟いた。確かに長い年月だった。優を失った頃の私は記憶が殆ど無い。優を失う時を目撃し、そしてその現実を受け入れられず泣いていたからだ。

その頃の私は、親からいつも同じことしか言わなかったと言っていた。それは

「ごめんなさい」

何度言っても届かない相手。だから私は何度も、何度も言い続けたのかもしれない。いつか届くようにと。

「ただいま」

そうこうしている内に優とチルノが帰ってきた。二人とも泥だらけである。

「あなたたち汚いわね」。早くお風呂入ってきなさいよ」

「はい」

二人は仲良く返事してお風呂に入りに行った。それは傍目から見たらまるで兄妹のようだった。

「もう私はそれだけ年をとってしまったのね…」

その後、私と優、チルノとエミリーで食事をとった。私はあまり話を振ることはせず、優が今日どんなことをしたのかを楽しそうに話し、それを聞いたチルノが一々反応をする。エミリーは微笑みながら聞いているだけであった。

そして夜、私はエミリーの計らいで、優と同じ布団で寝ることになった。少し二人で寝るには狭く思えたが、くつつくことで得られる優の温もりが、優が今この世で生があるということを感じさせてくれた。

「お姉ちゃんと寝るの久しぶりだね」

優は嬉しそうに言う。

「そうね。あの頃はいつも一緒に寝てたもんね」

お互いの布団は用意されていたが、いつも気がつけばどちらかの布団に入り一緒に寝ていた。

「うん。僕また一緒にお姉ちゃんと寝ることが出来て本当に幸せだよ」

「私も。また優に会えて本当に良かったわ」

これは私の本心だった。

「うん。でもね、お姉ちゃん」

優は私の目をしっかりと見て

「お姉ちゃんは夢から覚めなきゃいけないんだよ」と言った。

「え？」

私は何を言われているのか分からなかった。これは私の夢なのだろうか？

「ううん…。これは現実だよ。夢じゃない。でも僕はお姉ちゃんの夢なんだ。そして夢はいつか覚めるもの。ううん、覚めなくちゃいけないんだ」

「ゆ、優？ 私、何を言っているか分からないんだけど…」

「僕たちは確かに生き返ることができた。でもそれはしてはいけない事なんだよ。だからお姉ちゃんにこの夢を終わらせてほしいんだ」「終わらせるって言われても…。どうしたらいいの？」

「この夢は村にある大きな桜によって起きているんだ。だからあの桜が無くなればこの夢は終わるよ」

「で、でも…。例え夢であつたとしても今、亡くなった人が生き返っている。それはとても幸せな事でしょ？ 誰も傷つかないし、皆幸せになっているわ」

「確かにね。でも分かっているでしょ？ 死んでいる人は生き返られないんだよ」

まるで聞き分けの無い子供に親が納得させているかのようだった。しばらくお互い話さないでいた。するとポツリと

「ねえ、お姉ちゃん。この夢はね」

と話し始めた。

「うん…」

私は優に話を促した。

「確かに死んでいた人は生き返るよ。でもね、長く続かないんだ」
「え？」

「この夢は3日しか続かない。それ以上経つと消えてしまうんだ」
「ま、待つてよ。ってことは優も？」

「うん。あと2日したら消えちゃうんだ」

「そ、そんな…」

まさかそんな事が…。しかし実際の当事者である優である。その話は正しいのだろう。

「でも、それだとどうして桜の話になるの？ 優の話だと、3日経てば夢は覚めてしまうんじゃないの？」

「うん…。確かにね。でもね、生き返った人は誰に知らされるわけでもないけど、ある2つの事を教わるんだ」

「2つの事？」

「そう…。1つは自分が3日しか生き返れないって事」
「なるほど…。2つ目は？」

「2つ目は、自分が完全に生き返られる方法があるって事」

「生き返るって…。本当なの！？」

私は思わず身を乗り出すようにして聞いてしまった。それほどまでに衝撃の事実だったのだ。

「うん。でもだからこそ僕はお姉ちゃんにとめて欲しいんだ」

「意味が分からない…。そんな事止めるはずがないじゃないのよ！」
「これから話すよ。どうして、僕がとめて欲しいのか…」

その後、私は優から夢の真実を聞くことになる。それは到底信じられるような話ではなく、また、私はそれを聞いて優の望む事を行える自身は無かった…。

第六章

第六章

優が蘇ってから2日目が来た。優の話で言うと残り今日を入れるとあと2日である。

「おはよー、お姉ちゃん」

私が外で座って考えていると、寝ぼけ顔で優が顔を出した。

「おはよ」

私は短く挨拶を済ませた。まだ自分の考えがうまくまとまっておらず、なんて優に言ったらいいのか分からなかったのだ。

「やつぱり悩んでる？」

「当たり前じゃない…。あんな事を言われたら誰だって悩むわよ」

「だよねー。でも僕は信じているよ。お姉ちゃんが終わらせてくれるって」

優はそういうと笑顔で家の中に入っていった。

「はあ…」

私は今日何度目か分からないため息をついた。

「私がそんな事…できるわけ無いじゃない」

昨日の夜に優が話した事が頭を離れず、横で優はすやすや眠る中私は殆ど眠ることは出来なかった。

「散歩…行ってこようかな」

私は立ち上がり、お花見をしていた場所に気分転換に散歩しに行くことにした。

「あいかわらず綺麗ねー」

風で舞う桜吹雪が幻想的だった。それを眺めつつ歩いていくと、大きな桜の木が出てきた。

「この木が原因だったなんてね…」

私はその桜の木に寄りかかりながら昨日の優の話を思い返した。

「あのね、生き返った人はある方法で完全に生き返ることが出来るんだ。でもそれは3日間の内にしなければならぬの」

「自分が仮で生き返ったうちにしなければならぬのね？」

「うん。もしこのシステムがただ3日間生き返られるだけなら、もしかしたら本当にすばらしいシステムだったのかもしれない」

「そうね…。例えば短い間であつたとしても死んでしまった人に会えるのだからね」

「そう。でも生き返った人はどう思うのかな？」

「生き返った人？」

「うん。生きている人が羨ましく思えるんじゃないかな。もっと生きたいと思うんじゃないかな」

「確かに。そう思うでしょうね」

「でしょ？　そして生き返った人は自分が本当に生き返る方法を知っている。だからその行動を止める事はできないんだ」

「それで、その方法って何なの？」

「それは…」

優は少し考えた素振りを見せた。そして思い切ったように

「喰うんだ」

と言った。

「喰う…」

「そう。生を持っている者から奪うことによつて生き返ったものは本当の意味で生き返ることができる。そしてそれは自分が最も愛する者や、近しい者ほどいいんだ」

「それって…。まさか！」

「そう、僕の場合、お姉ちゃんになる」

「そんな…」

私の命と引き換えに優は生命を得る。そんな事実があつたなんて…。
「僕はそんな事をしてまで生き返りたくは無いよ。でも3日目が終わ

わりに近づくと、恐らく本能的に体が動いてしまうんだ。それまでにとめて欲しいんだ。誰でもない、お姉ちゃんに」

「でもそれじゃあ!」

「うん。僕は死んでしまうね。でもいいんだ。僕はもう既に死んでいるんだから。お姉ちゃんとまた話することが出来ただけで幸せだよ。私は何と返したらいいか分からなかった。」

「私の命をあげれば優は生き返られる…」

優はそんな事は望んでいないといった。あの子がそう言っているのは本心だろう。しかし、この問題を解決するということは、また優を私が殺すことと同義だ。そんな事は私にはできない。

「まったく…。どうしたらいいの?」

「おゝい、麻耶」

遠くからチルノの声がする。トコトコ走ってきた後

「朝ごはんだって。早くきなよ」

「分かったわ。今行くから」

私は無邪気なチルノの顔を眺めながらエミリーの家に引き返した。

朝食はいつも通りの光景だった。優は楽しそうにチルノと話をしながら食事をし、エミリーは微笑みながら紅茶を飲む。ただ私は暢気に会話する気にはなれなかった。

「あら? 随分元気が無いのね。食事、口に合わなかったかしら?」
エミリーが私の様子が変わることに気がついたのか、心配そうに声をかけてきた。

「い、いえ! そんな事はないですよ。とってもおいしいです」
私は心配をかけないように慌てて食事を進めた。そういえば、エミリーはあの桜の事実を知っているのだろうか?

「チルノ、また野球やろうぜ」

優は既に食べ終わったのか、チルノを遊びに誘っていた。

「ふふん、いい度胸ね。今度こそアタイが負けの意味を教えてあげるわ」

チルノが無駄に威勢よく返事していた。本当にこの短い間に仲良くなつたようだ。

「何をバカなこと言っているんだよ。だからお前はバカなんだ」

「バカっていうな〜!」

二人は慌しく外に飛び出していった。

「まったく、もう少しおとなしくできないのかしら…」

私は呆れていると

「それが子供というものよ。微笑ましくていいじゃない?」

まるで母親のような感じでエミリーは微笑んでいた。

「それで、あなたは何を悩んでいるの?」

エミリーは紅茶を飲みながら聞いてきた。

「え?」

「私でよかつたら相談に乗るわ。大したことはできないけどね」

「い、いえ…」

このまま悩んでいてもどうせ答えは出無そうなのだ。どうせなら聞いてみるのもいいかもしれない。

「実は…」

私は優から聞いた事実を話してみた。

「なるほどね」

話を一通り話した後、エミリーは少し考え

「そこまで知っているんだ」

と言った。この言葉の意味を読み解く限り、殆ど知っていたのだらう。

「エミリーも知っていたのね?」

「ええ。だってこの桜は私が作つたんだもん」

「え?」

「正確には、人々が願った思いが私を作り、そして私が作つたんだけどね」

「ちょ、ちよつと待って！」

一体どういう事なのか。あまりの事実の多さに頭がついていけなくなってきた。

「じゃ、じゃあエミリーは人間ではないのね？」

「ええ。思念体というのが正しいかもね」

「で、桜を作ったのはエミリーなのよね？」

「そう言ったわよ」

「じゃあ桜の仕組みを変える事はできるわよね、作った本人なんだから」

もしこの仕組みが変わるのなら優の事も希望が出来る！

「ああ、それは無理な話ね」

しかし話はそこまでうまくは無いようだ。

「どうして？ 作れたなら仕組みを変える事はできるんでしょ？」

「私は人々の死んだものを蘇らせるという思いから存在した者。だから仕組みを変えるほどの力はないわ」

「そう……」

思わず落胆する。何か方法があればいいのだけれど……。

「まあ桜が消える時、私も消える事になるんだけど私はどっちでもいいわ」

「え？ そうなの？」

「ええ。桜を作る為に私は存在したのだから、もし桜がなくなったらいなくなるのも当然でしょ？」

「ま、まあ……。でも、いいの？」

それは死ぬ事と同じなのだ。

「ええ。作ったのが人なら消すのも人なのよ。私はそう割り切っているから」

どうやら本心で言っているようだ。

「あなたが決めなくちゃいけない。これはあなたに託された問題なのだから」

「ええ……、分かっているわ」

少し風に当たろうと外に出ようとした時

「一つだけ」

とエミリーに声をかけられた。

「え？」

「一つだけあなたに言っておくわ。死んでしまった人を生き返らせる時、ある思いで蘇るの。たとえばあれを作ってあげたかった、あれをしてあげたかったみたいだね。きつとあなたもそうだったはず。それをしてあげてね。どうなるうともあと少しの時間しか残されていないのだから」

「してあげたかった…か」

私はドアを閉め、外に出た。優しい風が私の体を撫でた。

エミリーの言っていた事を考える。恐らく私はしてあげたかった思いで優が蘇ったわけではないと思った。そして私がどうしたかったのかは分かっている。

「私は優に謝りたいのよ」

あの時優に言うことが出来なかった事。幼い頃伝えたかった言葉。これをどうしても伝えなかったのだ。

私はまた桜を見に散歩に来ていた。桜を見ていると

「きゃあ~~~~~~~~~!!」

と突如悲鳴が聞こえてきた。

「な、何？」

私は慌てて声が聞こえてきた場所を目指した。するとそこではまさに生きたものを喰う事で生を受ける瞬間だった。

「うっ…」

その者の目は普通じゃなかった。赤く充血し、その者を貪るように喰っていた。

「うお~~~~~~~~」

雄たけびを上げると体中が光に満ちて辺りがまぶしくなった。

「くっ！」

私はあまりのまぶしさで目を開けていることが出来なかった。

光が収まるとそこには先ほどの者が普通に立っていた。目は正常になっており、特に異常は見られなかった。

「あれが優が言っていたことなのね…」

しばらくするとその者は歩いていってしまった。そこには何も残っていなかった。

「優も、ああなるといふの？」

私は想像した。優はそんなことは望んでいないといった。しかし本能で行ってしまうとも。そして優しい優のことだ。きっと後で後悔してしまうだろう。

「するしか…ないのよね」

私は直ぐに折れそうな決心をした。だってそれはとても悲しい決断なのだから。

私はチルノ達があそぶ公園に来ていた。

「ねえ、私も入れてよ」

「いいよ」

「ふん、じゃあ麻耶は私のしもべね」

「ふん！」

「あいた！」

私はチルノのお尻を蹴飛ばした。

「何か言った？」

「な、何にも？」

私はその後、3人で童心に帰ったように遊んだ。まあ私以外は子供だったのだけれど。

その夜、私は優と同じ布団にいた。

「決心してくれたんだね、お姉ちゃん」

「ええ…」

「ごめんね、お姉ちゃん」

「優……」

私が心が揺れているのがわかって心配してくれたのだろう。

「明日が最後。一日楽しもうね」

「ええ、そうね」

私は可愛い寝顔の優を見ながら思った。この選択が正しいものでありますようにって。

第七章

第七章

運命の三日目の朝が来た。

「おはよう、お姉ちゃん」

「ええ、おはよう」

私は普通どおりに挨拶した。この何気ない挨拶がもう二度と出来なくなる。私はそれが切なくて仕方が無かった。

「今日は何して遊ぶうか？ 僕、最後だからお姉ちゃんといっぱい遊びたいな」

「もちろんよ。優がしたいこといっぱいしようね！」

「うん！」

朝食の位置につく。この光景も今日で見納めになるかと思うと…。何だか全ての光景が私はとても愛おしく思えた。

「ごちそうさま」

「ごちそうさまでした」

「はい、おそまつさまでした」

私たちは朝食を食べ終わり、遊びに行くことにした。

「じゃあお姉ちゃん、僕先に行っているね。チルノも早く来いよ」

まだ黙々と食べているチルノに声をかけ、優は外に飛び出していった。

「ま、待つてよ」

チルノは慌てて口の中に食べ物詰め込み、優の後を追って飛び出していった。

「まったくあの子のはしたないんだから…」

私は呆れていると

「ふふ、いいじゃない。可愛いと思うわよ？」

エミリーは優雅に紅茶を飲みながら微笑んでいる。どうでもいいが、

エミリーは紅茶をどんだけ飲むのだろう？ 体が紅茶で出来ているのかしら？

「それで、あなたは決心したのかしら？」

「ええ」

「ふふ、まだ悩んでいるのね？」

簡単に見抜かれた事が少し悔しかった。

「まああなたの決めたことに何も異論は無いわ。私も、そしてあの子も…ね」

「うん。ありがとう、エミリー」

「お礼を言われることじゃないわ」

「じゃあ私、外に行ってくるから」

「はい、いつてらっしゃい」

私は支度を済ませ優の元に行くことにした。

「おりゃ〜」

「あう〜」

私たちはまず缶けりをした。近くに空き缶が転がっていたので優が提案したのだ。

「チルノ、お前弱すぎじゃないか？」

優が呆れたようにチルノに言う。

「うう…そんなことないもん！」

チルノは威張って言うが、明らかに弱すぎた。

まず、チルノは隠れるのが苦手すぎる。うまく障害物に隠れては見るのだが、それはそこにあるまじきものに隠れるのだ。そして私が優が鬼になった時、お互いにそんな所には隠れない。したがってそれは必然的にチルノになり、結果直ぐに見つかる。そして足で敵わないチルノは結果捕まってしまうのだ。

「これじゃ面白くないから、だるまさんが転んだをしようぜ？」

「い、いいよ！ こんどこそアタイが圧勝をしてやるんだから！」

まあ結果は言うまでもなかった。当然チルノの惨敗だ。何せ、チルノがいる時、バカというだけで反応しアウトなのだ。

「お前、本当にバカなんだな」

優が愉快そうに言う。私も改めて思った。こいつはバカだと。

「そ、そんな」

チルノも自分で自分に呆れているかのようにだった。まあ、これだけの事実を突きつけられたらショックも受けるだろう…。

「でも今度こそアタイが勝つよ！　こんどは何をする？」

決してそんな事は無かった！　まあこんな事でへこたれない所がチルノの良い所なのだけれど。まあ、ああはなりたくはないが…。

「うゝん、じゃあ次はね」

その後私たちは優が提案する遊びに付き合った。全てにおいてチルノは惨敗したのだが、それでも私たちは楽しかった。

「そろそろ昼食にしましょうか？」

お昼を過ぎた頃、私はそう提案した。

「うん！　僕、お腹空いちゃったよ」

「アタイも」

私は家を出る前にエミリーから借りたレジャーシートを広げ、おしぼりを二人に手渡した。

「はい、じゃーん！」

二人が手を吹き終わった後、私は弁当を広げた。

「うわ」

「おいしそ」

二人は目を輝かして弁当を見ている。

「これ全部お姉ちゃんが作ったの？」

「ええ、ただ味は保障しないわよ？」

「お姉ちゃんの作ったものなら当然美味しいよ！」

「それは言いすぎよ」

私は照れたように言った。だがその言葉がとても嬉しかった。
「はやく食べようよ」

どうやらチルノは待ちきれないのかイライラしている。

「はいはい。じゃあいただきます」

「いただきます！」

二人は争うように弁当を食べ始めた。

「二人とも、沢山あるんだからゆっくり食べなさいよ？」

「はい」

「モグモグ…（コクン）」

私は二人を呆れながら見ながらも、弁当を作ってきて本当に良かった。

「「ごちそうさま」」

二人は同時に食べ終わり、沢山用意した弁当は全て空になった。

「はい、おそまつさまでした」

私は片付けていると二人は横になっていた。

「アタイ、眠くなってきた」

「僕も」

「ふふ、じゃあ少しお昼寝でもしましょうか？ 気持ちいいもんね」

「うん」

「スヤスヤ」

既にチルノは寝ていた。私も少しウトウトしてきた。優との時間が減ってしまう事は残念だったが、こういう時間も私は良いと思った。

「おやすみ、優」

「おやすみ、お姉ちゃん」

私は穏やかな眠りについた…。

「うっ…」

私は何かの音に目を覚ました。それはうめき声のようだった。

「うん…何かしら？」

私は目を開けると、そこでは優が苦しそうに体を震わせていた。目

が赤く光り、いつもの優と様子が違うのは一目瞭然だった。そしてその様子は依然見た人を喰う者と酷似していた。

「まさか！」

気がつけば既に日が傾き始めている。優の、本能による生への執着、すなわち人を喰おうとする衝動が始まりかけているのだ。

「だ、大丈夫？ 優」

私は優に駆け寄ると

「あああああああ」

優は何かを良いながら私に負いかぶさり首を絞め、口を開けると何かを吸い始めた。すると私は途端力が入らなくなった。

「優……！」

私は必死に優を呼び続けた。私の声が届くようにって。

「うーん……。あれ？ もう？」

どうやらチルノが起きたようだ。するとその事で急に力が入るようになった。

「うっ……、ぐすっ……ごめん、お姉ちゃん……」

見ると優が泣いていた。行いたくない行動を抑えきれずしてしまった事への後悔が溢れているんだろう。

「僕、何も考えられなくなっ……。お姉ちゃんを見たら急に……。ごめん……。ごめんなさいお姉ちゃん……」

「いいの……、いいのよ、優。だってあなたの所為じゃないんだから……」

私は大丈夫だと伝えるように笑顔で優をあやす様に頭を撫でた。

「うわあああああああああ」

優は大粒の涙を流した。優がこんなに泣いたのはいつだったんだろうか。優は優しく、そして同時に強かった。人前で泣いたりすることは殆ど無かった。

「待っててね、優。直ぐに解放してあげるから」

私はもう迷いは無かった。確かに私が優を消すことは殺すことと同じかもしれない。確かに今ここで優は生きているのだから。でも私

はそれ以上に優がこんなに苦しんでいる姿は見たくなかった。

「行こう！ 桜に」

「うん…」

私は泣く優を連れてあの大きな桜に向かうことにした。

「ほらチルノ行くわよ！」

「えっと…何が何だか…。まあいつか」

相変わらず能天気なチルノである。だが私はその能天気さが何も聞いてこないので助かった。

「ここね…」

「うん」

私たちは大きな桜の木の前に来ていた。既に日は傾き夜になっていた。優はさつきから体が震え、汗が止まらない。既に限界が近いのだろう。

「いくわよ、優」

「お願い、お姉ちゃん…」

私はポケットからライターを取り出した。それはエミリーから受け取ったものだ。

「これで桜を燃やせるわ。そうしたら全てが終わるわ」

「ありがとう、エミリー」

「いいの。だって私はあなたたちが気に入ったから」

私はライターをつけた。それは青く光り輝く炎だった。私が火を近づけようとする

「ヤメロ…」

「っ！」

何者かの声がしたので振り向くと、そこには依然見た者がいた。目が血走っている。

「モヤスナ…。 ヤメロ…」

「モヤスナ…。 ヤメロ…」

気がつけば周りに人が集まってきている。まるで亡霊だ。一体何人いるんだ！

「チルノ、アンタに頼みがあるの？」

「何？」

「あいつらアンタをバカにしててね。あいつら全員懲らしめて欲しいの。出来る？」

「何〜！ 当然よ！」

チルノは走っていった

「アイシクルフォール！」

と攻撃をしかけた。あまりの事に戸惑った亡霊も自分たちの危機という事を悟り、チルノに目標を定めた。

「頼むわよ、チルノ」

私は再び火をつけ、桜に近づけた。火は少しずつ桜につき、すぐに広がっていった。

ザワザワと大気が震える感じがした。それはまるで桜が悲鳴を上げているかのようなだった。

「ありがとう、お姉ちゃん」

「優…」

優の姿が光っており、透けて見えた。消える前兆なのだろう。

「私は優に言いたかったことがあるの…」

私は最後の機会だと思い、告白することにした。たとえ非難されることになるうとも。

「何？」

優は微笑みながら答える。

「ごめんなさい！」

「え？」

私は頭を下げた。優は戸惑ったように

「な、なんでお姉ちゃんが頭下げているの？」

「だって、私のせいで優は死んじゃった。私があの時、買い物に誘

わなければ、もつと横断歩道で注意していれば優は死ななかったかもしれない。それに私さえいなければっ！」

「お姉ちゃん！」

私は呆然としてしまった。私、優に殴られたの？　そして優がこんなに怒った所を初めて私は見た。

「お姉ちゃんにそんな事言っただけで欲しくなかった！　僕はあの時の行動を後悔してないし、お姉ちゃんがいてくれて本当に良かった。そんな事を言わないでよ！」

「優……」

「お姉ちゃんはどう思っていたかは分からないけど、僕は満足だよ。だって」

優は笑顔で

「だって大好きなお姉ちゃんを守れたんだもん」

「う、うう……」

私は大粒の涙を流した。私はなんて幸せ者だったのだろう。こんなに優しい弟がいたのだから。

「だからお姉ちゃんも、もう苦しまないで。僕は怒ってもいないし、恨んでもいないんだから」

その時私は悟った。私は優に謝りたかったのではない、優に許して欲しかったんだ、と。あの時の行動を許して欲しかった思いが優を蘇らせたんだと。

「あ、もう時間だ」

「そう……」

「うん。ね、お姉ちゃん。最後に僕と約束してくれない？」

「約束？」

「うん。僕と二つ約束して」

「いいわ。何？」

「一つは僕の事をもう悩まないで」

「わかったわ。悩むと優にまた怒られそうだもんね」

「うん！　僕、お姉ちゃんの事怒るから！」

「ふふ、分かったわ。それで、二つ目は？」

「二つ目は、幸せになって」

「え？」

私はキョトンとしてしまった。

「お姉ちゃんには幸せになって欲しいんだ。誰でもない、僕の大好きなお姉ちゃんに」

「優……」

「ね、守れそう？」

私は即答した

「当たり前よ」

だって私は！

「私は誰よりも優が大好きなお姉ちゃんよ！ 約束は守るわ。優の事はもう悩まず、そして幸せになるって！」

「ありがとう。もうお別れだ……」

夕の光は大きくなり、もう殆ど優の姿は見えなくなっていた。

「バイバイ、お姉ちゃん」

「バイバイ、優」

直後光が弾けて優はいなくなった。桜は完全に燃え、そこには何も残っていなかった。

「あ、あれ？ あいつらは？」

亡霊と戦っていたチルノは突然いなくなったことで戸惑っていた。

どうやら桜の消滅とともにいなくなったようだ。どうやらたとえ喰っていたとしても桜が消滅すると消えてしまうようだ。

「もういないわよ。あ、それとチルノ」

「何？」

私はチルノの頭を撫で

「ありがとう。優とちゃんとお別れできたわ」

「？ う、うん」

どうやら分かっているようだ。まあ、後でゆっくり話してあげるとしよう。

「どうやら終わったようね」

「エミリー……」

エミリーがそこにいた。桜の消滅と共に存在の維持ができないのだろつ、酷く辛そうだ。

「私もこれでお別れ、楽しかったわ」

「私も」

「え？ エミリーお別れなの？」

まったく状況が把握出来てないチルノが不安げに尋ねる。

「ええ。私は帰らなければならないの。ごめんね、チルノ」

「うっ…、そんな」

「チルノ、バイバイしょ？」

私はあやす様にチルノの頭を撫でた。

「うん… バイバイ」

「はい、バイバイ」

エミリーは私に向きなおし、

「これで死者が蘇ることは無くなる。この村は普通の村になるわ」

「分かったわ」

「あなたと会えて良かったわ」

「それはお互い様よ」

私は笑いながら言った。

「ふふ、そうね」

私たちは握手した。

「元気だね」

「エミリーも… ってこれは変かな？」

「変ね。でもいいわ。じゃあね」

「ええ」

するとエミリーの姿は見えなくなり握手していた私の手だけ残った。

「ふ」

私は深呼吸すると

「じゃあ帰ろうか！」

「うん！」

私たちは家に帰ることにした。村に咲き誇る桜がとても綺麗だった。村を歩いていると

「ま、待って〜！」

と声がする。

「あ、霊夢」

チルノが口にする。どうやら本当に霊夢のようだ。すっかり忘れていた。

「酷いじゃない、麻耶。私を忘れるなんて！」

「ご、ごめん…。すっかり忘れてたわ」

「まったく…。気がついたら変な世界にいるわ、戻ってきたら誰もいないわで大変だったのよ？」

「まあいいじゃない。それより霊夢」

「うん？ 何？」

「変な世界ってどんな所だったの？」

「あ、アタイも気になる〜」

「置いていったから教えてあげない！」

どうやら霊夢はへそを曲げてしまったようだ。これはしばらく間を置いたほうがよさそうだ。

「じゃあ帰りましょ！」

「うん！」

「はあ…。私何しにここに来たのかしら？」

私たちは一路家へ帰ることにした。色々な事に遭遇したけど、結果的に私は来てよかったと思った。

まさに結果オーライ！

エピソード

エピソード

「で、どういうことですか？」

「え、えっと…」

私は正座をして幽々子さんの前に座っていた。どうしてこうなったか、少し戻って説明しよう。

「ただいま」

私は家に帰った後、場所を覚えてくれた幽々子さんにお礼を言い、屋敷を訪れた。

「おかえりなさい」

幽々子さんは縁側でお茶を飲んでいた。相変わらず絵になる人だ。

「あら麻耶さん。帰ってきてたんですね」

妖夢は庭で木を切っていた。私に気づいて作業を止め、こっちに来てくれた。

「麻耶さん、桜はどうでしたか？」

「ええ、とっても綺麗だったわ。幽々子さん、場所を覚えてくれてありがとうございます」

「いいえ、それで麻耶さん。例の物をお願いします」

「例のもの？」

「はて？ そんなものあったかしら？」

「まさか忘れていたなんてことはないですよ？」

「そんなまさか。ちよつと待ってくださいね」

私は頭を必死に働かせた。何だ？ 例の物って…

「桜の写真ですよ、麻耶さん」

妖夢が耳打ちしてくれた。あ！

「なんだ、あれですか。もちろん…」

そこで私は気がついた。写真…全然撮ってない！

「えっと…それが…」

「ふふふ、すっかり忘れていたようですね」

「いや、そんな事はないですよ！」

「すいません幽々子さん、笑顔が怖いです！

「ちよつとそこに正座してもらえますか？」

「幽々子さん、実はですね…」

「正座！」

「「はい！」」

何故か妖夢も返事し、二人そろって正座することになってしまった。

「まったく…。この数日間私がどれだけ楽しみにしてたと思うんですか？」

「すいません…」

かれこれ30分は幽々子さんのお小言を聞いている。さすがに私の足も限界を向かえそうだ。

「まあお説教はこのぐらいにしておきましょうか」

「よ、よかった…」

「さて、麻耶さんの罰ですが…」

「ば、罰…ですか？」

「当然じゃないですか…。いいですね？」

「は、はい。謹んでお受けします！」

ここで断れば何かがあるか分からない。受けたほうが懸命だと本能が告げていた。

「では罰ですが、麻耶さんには蔵の掃除をしてもらいます」

「蔵の掃除ですか？」

「ええ。近々蔵を掃除しようと思っていました。なので麻耶さんにはそれをしてもらおうと思います」

「わかりました」

私は小声で

「よかつた。どんな酷いことされるかと思っただけ、これなら楽勝ね」

「何か言いましたか？」

「い、いえ！ 早速やらせていただきます！」

私はダッシで蔵に向かった。さつさとやるに限る！

「ああ、麻耶さん？」

幽々子さんが何か言った気がしたが、私には聞こえなかった。

「明日からでいいと言おうとしたのですが…。まあいいですかね」

その事に気づいたのは掃除を終わらせた5時間後の事だった…。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4875j/>

東方夢想花

2010年10月10日18時54分発行